



市立岸和田市民病院だより

うらら

第19号
令和5年9月

【発行】
市立岸和田市民病院
広報委員会

特集

岸和田市民病院の歴史



当院は国指定「地域がん診療連携拠点病院」です

【目次】

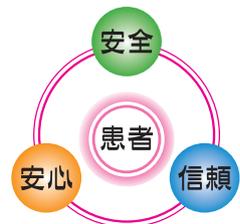
- P.2～5 …… 病院の歴史
- P.6 …… ロボット手術
- P.7 …… 看護フェア
- P.8 …… ミニレシピ
編集後記

～基本理念～

- ・市民の皆さんが安心して心のこもった良質な医療を受けられる病院をめざします。
- ・患者さん一人ひとりの権利と安全を確保し、絶えず向上心をもって皆さんに信頼されるよう努めます。

～基本方針～

- ・市民の皆さんが安心して良質な医療を受けられるように高度・専門医療と救急医療を充実する。
- ・患者さんが医療の中心であることを忘れず、個人の知る権利と決定する権利を尊重する。
- ・患者さんと職員の安全を確保する。
- ・地域の中核病院として地域医療連携を推進する。
- ・職員の教育・研修を充実し、絶えず向上心を持って努力する。



温かい心をもって、
良質で高度な
医療を提供します。

広報誌
うらら

泉州地方では、わたし達・おれ達という意味で、「うらら」や「おらら」が使われていました。いつまでも、わたし達・おれ達に愛される市民病院でありたいとの願いをこめて、「うらら」と名付けました。



このマークは岸和田市の頭文字「K」と「若葉」をモチーフに大空に飛び立つ鳥をイメージしています。「若葉」には若々しさや、健康、信頼関係。そして質の高い医療を温かい心で市民のみなさまに提供する心を表現しています。また飛び立つ「鳥」には地域医療の中核病院として、地域とともに発展していく姿を表現しています。

市立岸和田市民病院の物語

市立岸和田市民病院 副院長、患者支援センター長 尾上 雅彦

令和4年は岸和田市制100周年の記念の年でした。いろいろな催しが開催されていたかと思います。そんななか、市立岸和田市民病院は設立されてからどのくらい経っているのだろうかという素朴な疑問を感じ、色々な資料を調べてみたところ、資料によってそれぞれ記載が少しずつ異なっていることが判明しました。そこでこの機会に正確な史実を調査して記録に残し、市民の皆さんにもご紹介させていただくことにいたしました。

大正11年11月1日、旧岸和田町（明治45年1月に岸和田町、岸和田浜町、岸和田村、沼野村が合併）が市制を施行して人口約3万人の岸和田市が誕生しました。この頃にはまだ岸和田市には公的な“病院”がありませんでした。大正12年末に創設された寺田萬寿病院などの民間病院や開業医さんが地域の医療を支えていたのです。もちろんこのころはまだ国民皆保険制度はありませんでしたので、医療は必ずしも身近なものではなく、一般には医療を受けるにはたいへんお金がかかりました（国民皆保険制度が実施されるのは昭和36年になるまで待たねばなりません）。

当時は大流行したコレラなどの法定伝染病の患者さんを隔離するために、大正8年9月に設立された隔離病舎が上野町にありましたが（地元では避病舎とも呼ばれていました。近くに宮池という池があり、病舎の周りは焼き丸太の高い柵で囲われた平屋建ての建物だったそうです。元々は並松町あたりにあったらしいのですが大正8年9月に上野町に新設されました。）、現在の病院とは全く異質のものでした。岸和田市市政施行後は市医であった医師が管理、治療に当たっていたようです。

時代が進み、市民の保健衛生や医療への関心が高まり、昭和4年には市議会で無料診療所設置の議案が上程されましたが、これは成立はしませんでした。ようやく昭和12年に、岸和田市、山直町、春木町、南掃守村、土生郷村、八木村で岸和田市外五ヶ町村病院組合が設置され、組合役場を南掃守町に設置し、組合立病院（公立病院）が開院となりました。現在のところ、これをもって岸和田市民病院の創設と考えるのが妥当なようです。

その後、八木村は春木町と合併、土生郷村は岸和田市と合併し、残った岸和田市ほか春木町、山直町、南掃守村の3ヶ町村で昭和16年5月1日に西之内町496番地（現在の加守町）に市町村組合立、公立大宮病院が開院となりました。（写真1、2、3）。写真4は公立大宮病院時代の“病院の葉”ですが、この葉の中の地図によれば、公立大宮病院は春木競馬場（現在の中央公園）の向かい側で、旧岸和田市民病院があった場



写真1
公立大宮病院



写真2
公立大宮病院



写真3
公立大宮病院の診察券



写真4
公立大宮病院時代の“病院の葉”

KISHIWADA CITY HOSPITAL

所、現在の徳洲会病院のあたりにあったことがわかります(写真4)。地図の左下に書かれている南海電鉄の春木駅が最寄りの駅ですが、当時の春木駅は写真5のような、小さな木造の駅舎でした。駅前においてある大八車が時代をいっそう感じさせます(写真5)。同じ頃の南海岸和田駅と駅前通り商店街が写真6です。もちろんまだアーケードはありません(写真6)。

公立大宮病院開設時は敷地面積約10030坪(約33156㎡)、木造瓦ぶき平屋建てで、内科、外科、小児科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、皮膚泌尿科、レントゲン科の8診療科を擁し、病室が70室、収容患者数104人、職員数は97人だったそうです(医師の数は不明)。病院内には当時の看護師不足を解消するため、“公立大宮病院看護婦養成所”が設立され、定員30名で看護師の養成を行っていたそうですが、その後この看護師養成所がどうなったのかは残念ながら記録がありません。昭和17年1月には敷地内に大宮病院伝染病院を併設しています(写真2)。敷地面積は3830坪(約12640㎡)、木造瓦葺き平屋建てで、38の病室を有し、38人の患者さんを収容できました。この時代の岸和田市の記録を見ると、結核以外の伝染病として、ジフテリア、赤痢、腸チフス、などが市内で流行したとあります。

昭和17年4月には、岸和田市、春木町、山直町、南掃守村が合併して新たな岸和田市となり、これに合わせて公立大宮病院は“岸和田市立病院”と改称されました。

昭和31年3月、敷地内に結核病棟を新築し、岸和田市立病院の収容患者数は一般病床100、結核病床100となります。

その後昭和36年8月には、病院の名称を現在の市立岸和田市民病院に改称、10月には病院本館が新築され、昭和37年には名実ともに総合病院となりました。これがいわゆる“旧岸和田市民病院”です(写真7)。公立大宮病院時代に入り口前にあった蘇鉄の植え込みは、旧岸和田市民病院の正面にもそのまま残っていたことがわかります。

その後の増改築、診療科や検査部門の増加などを行なって、病院は少しずつ大きくなっていきました。昭和50年の市立岸和田市民病院のパンフレットを見ると(写真8、9)、内科、外科、産婦人科、小児科、眼科、耳鼻咽喉科、皮膚科、整形外科、泌尿科、放射線科、歯科、検査科、麻酔科の13診療科を擁し、一般190床、結核病棟100床、伝染病棟35床の合計325床を有する総合病院であったことがわかりますが、この時の医師数がわずか16人しかいなかったと記載されていますので、医師にとってはひじょうに忙しい病院であったであろうことが容易に推測できます。ちなみに当時の日本では医師の数がまだまだ少なく、現在の半分以下しかいなかったことは、一般にはあまり知られていないようです(昭和53年の日本全国の医師数は人口10万人あたり124人で、平成30年の258.8人と比べて半分以下でした)。



写真5
昭和17年頃の南海春木駅



写真6
昭和17年頃の南海岸和田駅と駅前通り商店街



写真7
旧岸和田市民病院



写真8
昭和50年頃の病院パンフレット

【特集】市立岸和田市民病院の歴史

この旧岸和田市民病院では現在の市民病院と比べると、病室は狭く、隣のベッドとの間隔がほとんどなかったようですが、当時の病院としてはこれが一般的だったのでしょうか（写真10）。同様に受付周辺も廊下も狭くて薄暗く、昭和の子供達にとっての病院のイメージは、まさにこの風景と、廊下に漂う消毒液の匂いであったように思います（写真11、12）。その後、昭和54年3月には結核病棟を廃して一般病棟と外来診察室に改編し、認可病床数は267床となりました。この頃の岸和田駅前はこの感じでした（写真13）。

昭和63年に市立岸和田市民病院病院年報第1号が出版されました。年報というのは、1年間の病院の経営状況や、入院患者さんや手術の件数、職員の数、各種の取り組みなどをまとめた年一回発行の刊行物です。この昭和63年の年報によれば、市立岸和田市民病院の病床数は一般271床、伝染病36床の合計307床で、診療科は内科、外科、整形外科、脳神経外科、小児科、産婦人科、耳鼻咽喉科、眼科、皮膚科、泌尿器科、放射線科、歯科の12診療科が設置されています。常勤の医師の数は35人と増えてはいますが、現在と比べればまだまだ少ない状態でした。看護師（当時は看護婦）は163人いましたが、このうちの62人は准看護婦でした。

この頃になると病院の建物、施設の老朽化が進み、市民病院で近代的な医療を行うことがだんだん困難になりつつありました。岸和田市の人口はすでに18万人を超え、患者数、救急搬送件数も増加の一途でしたが、市民病院はこれに対応するには十分な規模とは言いがたい状況だったようです。昭和60年には岸和田救急の救急車出動件数が年間386件であったのに対して、岸和田市民病院が救急搬送を受け入れることができたのは、わずかに3%、98件にすぎなかったと報告されています。岸和田市民病院は当時はまだ救急告示病院ではなく（救急告示病院の指定は平成2年）、24時間診療体制もまだ確立していなかったのです。このような状況の中から、徐々に岸和田市民病院の新築を検討する空気が生まれていきました。

参考として当時の（平成2年度）泉州地域の公的病院の状況はどうであったかをまとめてみると、泉大津市には泉大津市民病院215床、和泉市には和泉市立病院327床、忠岡町に公立忠岡病院85床、そして岸和田市に市立岸和田市民病院271床、貝塚市に市立貝塚病院249床と国立千石荘病院260床、泉佐野市に市立泉佐野市民病院348床、そして阪南市に公立尾崎病院185床がありました（全て当時の名称のまま記載、一般病床のみ）。泉州地域の市町の中で人口は岸和田市が最大であるにも関わらず、公立病院の病床数、規模は他市に比べて少ないと言わざるを得ない状況でした。

昭和63年9月に岸和田市議会に市民病院改築調査特別調査委員会が設置され、いよいよ新病院建設へ向かって進み始めます。平成2年4月に岸和田市民病院改築室（改築準備室）が設置され、翌年平成3年3月には病院の基本設計が完了しました。その後、数多くの会議や検討会、許認可の手続きを行い、ようやく平成



写真9
昭和50年頃の病院配置図



写真10
昭和50年頃の旧市民病院 病室



写真11
昭和50年頃の旧市民病院 薬局前待合



写真12
昭和50年頃の旧市民病院 外来廊下

5年8月に岸和田市民病院の現在地への移転新築工事が着工されました。

工事は総工費260億円をかけた大事業でした。敷地はもともと池のあった湿地でしたから地盤強化も必要でしたし、そもそもこの土地には水道管などのインフラがきていませんでしたので、山側の長栄会館横から新たに配管工事を行い、病院への水の供給ができるようにしたそうです。

平成7年9月22日、市立岸和田市民病院の定礎式が執り行われました。壁面に埋め込まれた定礎箱には定礎銘板、市民病院の設計図書、予算書、市政要覧、市総合計画書、市議会回顧、市職員録、市広報誌、現行紙幣（1万円、5千円、千円）、現行コイン（500円、100円、50円、10円、5円、1円）、そして当日の5大紙と言われる新聞の朝刊が収められました。定礎銘板に書かれた定礎銘には “市立岸和田市民病院を岸和田市額原町二番地に新築するにあたり市民の福祉と健康を願い国家のかぎりなき進展と繁栄のために努力することを誓いここに誓詞を納めて永世不滅の礎石を鎮定する”と書かれているそうです。定礎式はもともとは神事ですのでこのような言葉になっているのだと思いますが、令和の時代に新病院が建築される時、どのような言葉が定礎銘板に刻まれるのかちょっと気になります。

そして平成8年5月8日、ついに市立岸和田市民病院の新病院（現在の病院）が開院となりました（写真14、15）。敷地面積は約19880㎡、地下1階地上6階建て、当初は一般病棟の他に伝染病棟があり、病室も一人当たりの占有面積が格段に広くなりました（写真17）。診療部門には19診療科を擁し、常勤51人、非常勤嘱託（研修医を含む）29人の医師を揃えていました。19診療科には内科、外科、呼吸器科、心臓血管外科、脳神経外科、整形外科、形成外科、小児科、産婦人科、皮膚科、泌尿器科、耳鼻咽喉科、眼科、歯科口腔外科、精神神経科、麻酔科、リハビリテーション科、放射線科、検査科がありましたが、内科はさらに一般、消化器、循環器、代謝内分泌、神経、血液に細分化し、より専門性を高めています。

その後の紆余曲折を経て、現在は400床、33診療科、常勤とフルタイムの会計年度職員（以前の非常勤嘱託）を合わせて110人の医師を揃える病院となりました。看護師は常勤と会計年度職員（パート）を合わせると400人あまりが勤務し、全病院職員数は750人を数えるに至りました。また地域がん診療拠点病院、地域医療支援病院、難病診療連携拠点病院、がんゲノム医療連携病院などに認定され、高度医療に対応できる泉州地域の中核病院となっています。

近い将来、新病院建築の議論も行われることでしょうか。市立岸和田市民病院が市民病院であり続けるためには何が必要か、市民のために何をしなければならぬか。私たちは日々自問し続けながら、そして歴史に学びながら、今後も最善の医療を提供し続ける決意を新たにして、この稿を終えたいと思います。



写真13
昭和50年頃の南海岸和田駅



写真14
現在の市立岸和田市民病院

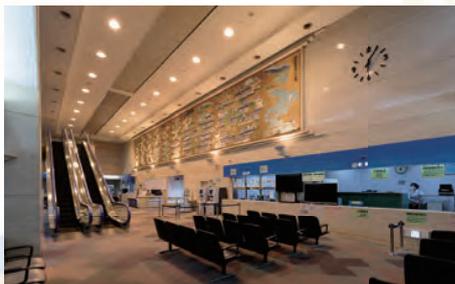


写真15
現在の病院ロビー



写真16
現在の病室（大部屋）

ロボット支援下手術について

ロボット支援下手術は1990年代に開発された手術支援用ロボットを使用した手術に始まり、今日では患者さんへの負担の少ない低侵襲性から世界各国で広く使われています。日本でも2021年より前立腺癌に対する泌尿器科手術が医療保険の適応となって以降多くの施設に導入され、その後外科・婦人科・呼吸器外科・心臓外科分野と保険適応手術は増加傾向にあります。

当院でも最新鋭機である内視鏡手術支援ロボット『ダヴィンチ Xi』を導入し、泌尿器科、外科、婦人科で手術に取り組んでいます。今の所全ての手術症例をダヴィンチで行うわけにはいかないのですが、徐々にその適応疾患を拡大していきたいと考えています。

ロボット支援下手術はロボットが自動的に進める手術ではありません。あくまでも手術を行うのは医師であり、ロボットの役割は医師が行う手術を支援することです。手術に際しペイシェントカートの内視鏡カメラと3本のアームを患者さんの体内に挿入し、術者である医師がサージョンコンソールと呼ばれる機器に座り、手にマニピュレーターといわれる操作機器を装着し、手と足を使い遠隔で患者さんの体内の手術鉗子やカメラを操作し手術が行われます。手術をサポートするスタッフはビジョンカートのモニターで手術の様子を観察することができます。

このダヴィンチ手術の最大のメリットは繊細で緻密な手術が可能ということです。例えば泌尿器科領域の前立腺癌手術などは骨盤底にある臓器ですが、その骨盤腔の狭い場所でも目標としている部位に直接アプローチすることができ、細かい操作が要求されるその神経温存手術においても非常に繊細で緻密な手術操作が可能となりました。従来からある患者さんの身体的な負担が少ない腹腔鏡手術の特徴を生かしつつ、ロボットの機能による支援によって、従来不可能とされていた手術が可能となっています。

もちろん、手術の大原則は安全かつ確実に手術を完遂することであり、手術を受けた患者さんから当院での手術を受けてよかったと感じていただけるように取り組んでいきたいと考えており、そのために日頃から当院では技術向上に向けてスタッフ一同切磋琢磨しております。



4年ぶりの開催!看護フェア

看護局では、毎年ナイチンゲールの生誕月である5月に「看護フェア」を開催してきました。過去の看護フェアでは、病気や症状の理解、治療に伴う副作用対策、物品の展示、体験などを行い看護をPRしてきました。

2019年の開催以後は、新型コロナウイルス感染症の流行により、患者さんやご家族と直接コミュニケーションを取る方法は避け、ホスピタルロード(1階外来棟から病棟への廊下)にポスター掲示などを行ってきました。しかし、新型コロナウイルス感染症が5類へ変更されることを機に、4年ぶりに従来の方で開催しました。

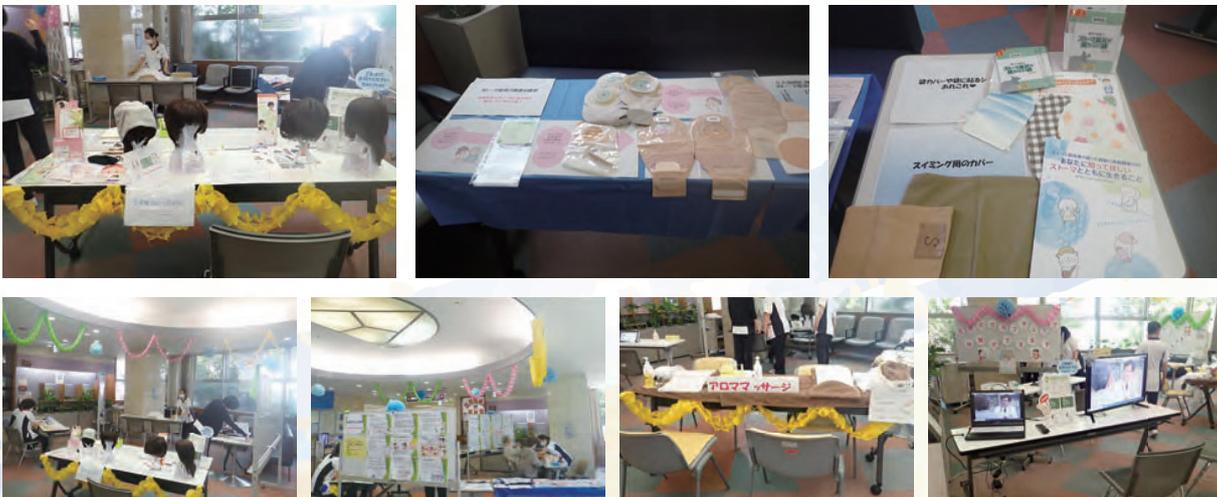
2023年看護フェアのテーマは「がんになっても自分らしく生活していこう!」とし、5月8日と9日の2日間、外来の一部エリアを会場とし開催しました。このテーマは、今年度の病院目標が「高度急性期医療(特に5大がん治療)、救急医療を強く推進する」ということから決めました。

内容は表の通りで、相談などは特定の看護分野において熟練した看護技術と知識を有する認定看護師が担当しました。がんと診断されても、患者さんやご家族らしい生活ができるための情報提供を主としました。

	5/8(月)	5/9(火)
体験	<ul style="list-style-type: none"> ● 乳房模型を用いた自己診断 ● ストーマケア用品の紹介と疑似体験 	<ul style="list-style-type: none"> ● リンパ浮腫に対するマッサージ ● 症状緩和に関するアロママッサージ
測定 / 相談	<ul style="list-style-type: none"> ● 認知機能を iPad を用いて自己診断 ● 化学療法の副作用相談 	<ul style="list-style-type: none"> ● 認知機能を iPad を用いて自己診断 ● ストーマケア用品の紹介・相談
ポスター掲示	<ul style="list-style-type: none"> ● がん患者さんのお金と仕事 ● 人生会議をはじめませんか? 	<ul style="list-style-type: none"> ● がん免疫療法の副作用について
動画上映	<ul style="list-style-type: none"> ● 「あなたらしいがんの療養」 	

参加された患者さんやご家族からは「知らなかったことが聞けてよかった」「実際触れてみてよくわかった」「実際に試着ができ購入しようと思った」など感想をいただきました。

限られた時間とスペースでの開催でしたが看護職員にとって、いただいた感想から患者さん、ご家族の生活の質を良くすることに、少し貢献できたのかもと思えた4年ぶりの貴重な時間でした。





焼き茄子の香味だれ

茄子が美味しい季節、香り豊かな焼き茄子はいかがでしょうか。今回はいつもの焼き茄子とは一味違う香味だれのレシピをご紹介します。香ばしい香りと香味野菜の香りがマッチして美味しく出来上がります。香味だれは焼き茄子以外に冷奴にかけても美味しく頂けますよ。病院給食でも人気のメニューです。ぜひお試しください。

栄養管理部

〈材料〉1人分

焼き茄子 …………… 70g
(茄子1本分程度)

〈香味だれ〉

A { おろししょうが …… 2g
ねぎ(小口切り) …… 2g
煎り白ごま …………… 1g
しょうゆ …………… 5g
米酢 …………… 0.8g
砂糖 …………… 0.3g

〈作り方〉

- ①焼き茄子を作ります。グリルやフライパンを用いて茄子を焼き、熱いうちに皮をむいて冷ます。
- ②出来た焼き茄子を適当な大きさに切る。
- ③Aの材料を合わせて香味だれを作る。
- ④焼き茄子を器に盛り、上から香味だれをかける。

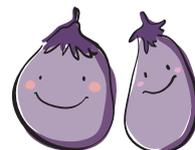
※もっと簡単に作りたい時は…

香ばしさは減少しますが、電子レンジで簡単に作る方法を試してみてください。

【電子レンジで作る焼き茄子】

- ・茄子の皮をむき、水につけておく。
- ・茄子をラップで包み、耐熱容器に載せて電子レンジ600Wで3分程度火が通るまで加熱する。

※香味だれは 5人分が作りやすいので、多めに作っても◎



【栄養量・1人分】

エネルギー 26 kcal、
たんぱく質 1.3g、脂質 0.6g、
炭水化物 4.1g、食物繊維 1.8g、
食塩 0.65g



今号は、当院の歴史の特集やロボット手術、看護フェアについて掲載しました。次号は、新たな特集を予定しております。

当院は今後も患者様を中心に、医師、看護師及びコメディカルが連携し、より良い医療を提供できるように努めてまいります。

引き続き「うらら」では当院の新しい動きや、特徴などをお知らせさせていただきます。

